



1 課題

平成26年8月の広島豪雨、平成30年7月の西日本豪雨等に見られるように、線状降水帯を伴った豪雨が多く発生しており、流域における被災リスクが高まっている。一方、市街地では宅地化の進行により街の保水力が低下し、度重なる浸水被害が発生していることから、豪雨災害を想定した土地利用の再編が課題となっている。

2 概要

災害を想定した土地利用を

- ・「まもる」（土木的ハード整備により災害から守る区域）
- ・「さける」（居住を制限する区域）
- ・「つきあう」（建築物の建て方でリスクを軽減する区域）

の3点の視点から、学術的知見や化学的根拠に基づき検証する。

大学

田中 貴宏

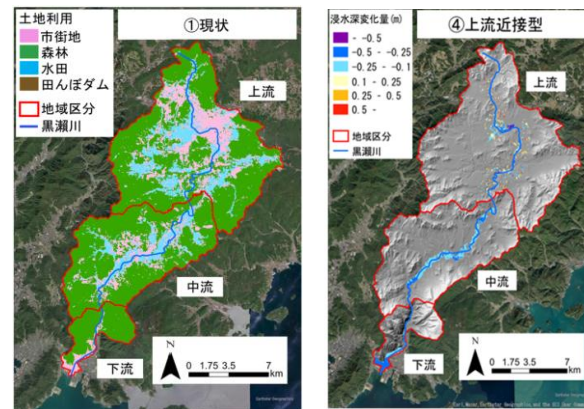
広島大学

大学院先進理工系科学研究科 教授

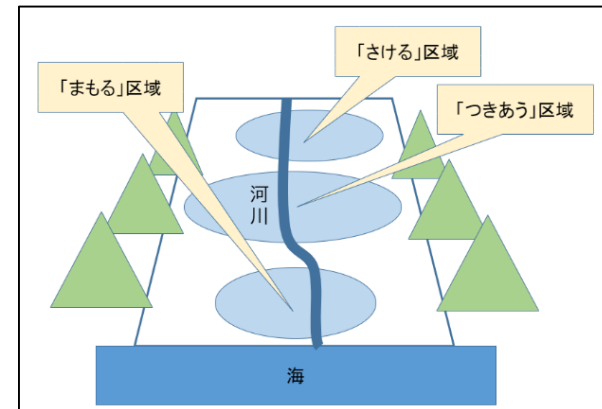


市担当課

×

建設部
技術企画課

▲洪水シミュレーションとその結果の分析



▲研究イメージ

3 研究成果 手法等の構築

①黒瀬川流域を対象とした、河川氾濫シミュレーションを行うための、流域モデル（土地利用、地形、河川等）の構築を行った。

②11の田んぼダム導入シナリオを作成した後、それらに対して河川氾濫シミュレーションを適用し、全シナリオそれぞれの被害抑制効果の定量化を行った。

4 今後の展望・現状 次の研究段階へ前進

今回の研究成果をもとに、黒瀬川流域に実証実験サイトを設定し、田んぼダムの実証実験を行うとともに、流域土地利用シナリオを作成する。（R6年度COMMONプロジェクト「共同研究型」で継続研究中）